



親愛なるご支援者のみなさまへ

今年5月、タイを後にして日本の家族と共に過ごし始めてから、あっという間に5ヶ月が経とうとしています。みなさま、お元気でお変わりなくお過ごしでしょうか。諸般の事情で、みなさまへのお知らせが大変遅くなってしまいましたことを深くお詫び申し上げます。

すでにご承知のとおり、私は武力によって民主化を推進する人々を弾圧した現政府に対して“Stop Killing!”を訴え、そのことが原因で銀行口座を凍結され、非常事態令違反容疑で逮捕状を出されることになりました。なぜ私がそのような行動をとったのかと申しますと、私にはこれまで長年にわたってタイの貧困層の人々のために活動してきた経緯があるからです。

今回の武力弾圧では多くの人々が犠牲になったため、私は肉親を失った子どもたちのことを最初に憂いました。また、病院に見舞った負傷者の多くが身体に障がいが残り、生涯にわたって生きていかなければならなくなったことを深く悲しみ、とてもじっとしてはいられませんでした。被害者の中には、たまたま通勤中であつたり、買い物で近くにいたという人も含まれていました。

また、これまでのNGOでの経験から、私は国連人権高等弁務官事務所の委員(Board Member of the United Nations Voluntary Fund on Contemporary Forms of Slavery)を拝任しており、世界各地で実施されている子どもの権利に関する活動を検証する責任がありました。タイ国内は「非常事態令」下であり、政府は誰に対しても、また何に対しても、どのようにでも特別の権力を行使できる状況にあります。そうした状況下でも国連の委員として力を尽くさねばと努力いたしましたが、政局の混乱による身の危険を日増しに感じるようになったため、やむなく夫と二番目の息子が生活している日本に行くことにしました。

そうした中で、去る8月末から9月初旬にかけて、私はスウェーデンを訪ねました。創立10周年を記念して、「世界子ども大賞」財団が主催する「子どもの権利のための真の英雄」大会に出席するためでした。式にはシルビア王妃が主賓で出席され、過去の受賞者の中でも特に活躍した人として子どもたちの投票によって認められた受賞者が表彰を受けました。幸運にも私もその一人に選ばれ、記念品と花束を王妃からいただきました。中でも、最も得票数が高かったのは南アフリカの元大統領であるネルソン・マンデラ氏とご夫人のグレス・マシエルさんご夫妻でした。民主主義の発展と、子どもの権利の推進と実現に多大な貢献があったことがその理由でした。

授賞式の後、私はスウェーデン各地の小学校などを訪問し、タイでの活動報告を行いました。スウェーデンでは、多くの人たちがタイの子どもたちの問題に関心を寄せてくれましたので、とても嬉しく大きな励ましを受けました。

私は、しばらくタイを留守にしていますが、現在もインターネットや電話などを活用してダウン・プラティープ財団やシーカー・アジア財団のための活動を続けています。この場をお借りして、みなさまの相変わらぬご支援・ご協力に対し、深く感謝を申し上げます。

近い将来、今も首都バンコクに発布されている「非常事態令」が解かれ、みなさまとタイでお会いできますことを心待ちに致しております。

合掌

2010年10月吉日

プラティープ・ウンソンタム秦

荒巻先生のスタディ&ワークツアー20周年、「絆の家」が落成



「スタディツアー」とは、異文化社会などで有意義な体験をすることで、自分の人生の目標をみつけたり、方向転換したりするきっかけとなる旅のことです。大学の講義では決して知り得ないことを学ぶことができます。

プラティープ財団では20年以上にわたり、タイ国内外の学生を多数受け入れてきました。学生らはタイの社会的問題を学んだり、アブラヤシ植林を通じて地元の青少年と交流したりと、文化交流、スポーツ、レクリエーションなどさまざまな活動を通じ、多くのことを学んだはずです。今も年間1500人以上が「スタディツアー」を通じて当財団を訪れています。

近畿大学の荒巻裕副学長が学生のための生きた講義として「スタディ&ワークツアー」を実施してから今年で20年になります。参加者は毎年、スラム地区見学や、「生き直しの学校」チュンポーン校およびカンチャナブリ校で各種プログラムを体験しています。なお、今年の8月21日から26日にかけて行われた「スタディ&ワークツアー」には8名が参加しました。

一方、同月24日には「絆の家」の落成式が行なわれましたが、この建物は今後、訪問客の活動スペースもしくは宿泊所として利用されます。

当財団では、スタディツアー参加者がタイの青少年との交流を通して、異文化理解を深めることができるよう願っています。

Tom Wells ファミリー大型遊具を贈呈、子どもたちは大喜び



10月3日、Tom Wells ファミリーを主賓に迎え、バンコク都内ワットクロントイナイ地区で大型遊具などの贈呈式が行われました。

The Thomas B Wells Charitable Fund（代表はTom Wells氏）は、これまでにリムクンプラカノン地区とフラット23-24地区にも遊具類を贈呈されました。これらの遊具類は、当財団消防ボランティア隊員の青年たちが製作したものです。

The Thomas B Wells Charitable Fundは、カンチャナブリ県内のカレン民族の村、リージア村での託児所建設費、農村部の学校のコンピュータ室や図書室の改装費、書籍（ドゥアン・プラティープ財団30年の歩み）の出版費などをご支援。また、スラム地区の公立学校に各種楽器を寄贈されたり、青年育成事業に協力したりと、プラティープ財団の活動に協力いただいております。

贈呈式には、Tom Wells ファミリーが出席。また、財団側からはサン理事長、ミンポーン副理事長のほか、地域住民が大勢参加しました。

今回、遊具が寄贈されたエリアは巨大な石油タンクに隣接しており、ここで882世帯約2200人が生活しています。危険な場所と知りながらも、他に行く場所はなく、仕事場にも近いこの場所から移動することがで

きないのです。

日雇い仕事で得ることのできる日収は平均150～200バーツ。建物が密集するエリアに作られた子どもたちの遊び場に7台の頑丈な遊具が設置され、子どもたちは大喜びでした。

The Thomas B Wells Charitable Fundの皆様、どうもありがとうございました。

クロントイ信用組合 スラム住民を借金苦から救う

その日暮らしのスラム住民の多くは、医療費や生活費に当てるため、借金を余儀なくされるケースが少なくありません。しかし、借金をしたものの、元金や利息の返済が滞り、さらに困窮度を深めることもしばしばです。

こうした問題を解決するために、プラティープ財団では1994年、クロントイ信用組合を立ち上げました。信用組合設立の目的は、借金地獄からの救済および貯蓄促進でした。現在、クロントイ地区および近郊地区で1472人の預金者がおり、預金高は1630万バーツに達しています。

この信用組合の利点は、他の銀行よりも住民たちに開かれており活用しやすいことと、利息によって得られた利益が配当金として預金者（組合員）に毎年還元されることです。

9月19日には定例総会が財団事務所で開催され、組合理事と地域の員250人が参加。総会では330人の優良預金者が表彰されました。表彰式後は、信用組合の新理事選出が行われ、理事長には昨年に引き続き、ゴーンガモン・ブンプグローン氏が選ばれました。

優良預金者のトーンラット・トランパーニットさん（58歳、女性）は、第4-5-6地区の住民で、様々な仕事をして生計を立てています。1997年から信用組合の組合員となり、収入が安定しない状況ながらも毎月200バーツの積立を欠かさずに続けており、預金額は数万バーツになっています。老後も自力で生活できるようにと頑張っています。

パンヤー・プレーニーさん（39歳、男性）は、70ライ地区の住民で、バイクタクシーの運転手として働き、1日の収入は平均200バーツ。以前、高利貸しから借金し、1日500バーツの利息返済のため家財道具を処分するなど、借金苦と闘っている時に信用組合の組合員となり、借金を返済。当時は信用組合の20倍もの金利を負担していたことになり、今では子どもの養育費を

える余裕も出てきたようです。彼は、スラム住民が身近に利用できる「信用組合」が出来たことに大変感謝しています。



クロントイのマラットリーさん 善行な青年として表彰される



法務省管轄下の児童福祉協議会では「青年の日」にちなみ、全国の青年の中から地域社会の活動に貢献している青年を表彰しています。これは、非行や虐待の防止や自然保護活動など、地域のために日夜献身的に活躍している青年を激励するためのものです。

プラティープ財団では今回、マラットリー・ムッサターファークンさん（25歳、ニックネームはエル）を推薦しました。クロントイ地区で生まれ育った彼女は現在、ラムカムヘン大学に在学中。小学4年の時に当財団の教育奨学金を受けて以来、放課後や長期休暇中は財団が主催する活動に積極的に参加しています。

さらに、地域内にある第1-2-3地区図書館で読書推進活動を行うほか、友だちや年下の子たちの学習相談も担ってきました。

2008年には地域内の模範青年の一人に選ばれ、ウボンラット王女より記念の盾を受けるとともに、受賞者全員と王女に拝謁する機会を得ました。そして、今年8月、タイ全国76県から推薦された100人の中から、善行な青年女性として表彰されました。彼女の受賞は、地域住民や多くの青年にとって非常に嬉しいニュースとなりました。

財団職員一同、彼女の受賞を称え、今後の活躍を応援していききたいと思います。



ペットボトル再利用ワークショップ 作品は幼稚園に贈呈

9月26日、プラティープ財団の幼稚園開発事業でアイデア商品を企画している会社の協力のもと、「ギブバック・プログラム」を実施しました。

同プログラムにより別途収入を得ていくことを目的として、地域の幼稚園の先生や住民など約100人が参加。ワークショップでは、回収したペットボトルを電気スタンドや花瓶などとして再利用する方法を学びました。また、商品化して販売することも話し合いました。

これにより、地球温暖化を防いだり、ゴミの排出量を減らしたりすることにも貢献できます。参加者は皆、幼稚園児や友人に作り方を教えることができるよう、真剣に取り組んでいました。

また、ワークショップで作られた作品は、それぞれの幼稚園に贈呈されました。



エイズ予防対策キャンペーン 『性について語る日』



プラティープ財団では1988年、地域内の子どもや青年に対するエイズ啓蒙活動促進のために「エイズ予防対策キャンペーン」を立ち上げました。

以来、地域の家族への啓蒙活動のほか、HIV感染者やエイズ患者に対して治療薬や治療費、そして、エイズ孤児への教育奨学金支給などの支援を行っています。

当財団は2003年から保健省の「グローバルファンド」予算を得て、NGO6団体とともにバンコク近郊14県で啓蒙活動を実施しています。活動内容は、エイズ情報の提供、性教育、エイズ予防対策などで、地域の若者（12歳～24歳）を対象にしています。キャンペーンは今では、39地区、バンコク都内のスラム131地区に及び、約2万人が活動に参加するまでに拡大しています。一方、エイズ予防対策事業部は8月20日、「性について語ろう」をテーマとしたイベントに参加。会場では多くの若者たちからの質問に答えました。会場となったサイアムスクエアには、大勢の若者が集まり、保健省エイズ対策部代表のマニット医師が開会の挨拶。その後、パントマイムや劇なども催されました。

奨学生100人 スワンゲーオ寺院で1日修行

教育里親事業部では9月4日、奨学生ら（8歳～13歳）約100人をノンタブリ県（バンコク近郊）のスワンゲーオ寺院に連れ行き、僧侶からの講話「若者と修行」を聞き、瞑想などの修行を行いました。

講話をされた僧侶は、「家庭や社会の問題に直面し、間違っただ道に入ったとしても、人それぞれには人間としての価値があり、そのことを自覚して正しい行いをしていく中で、必ず解決の糸口を見つけていくことができる」と強調しました。奨学生らは皆熱心に聞き入り、様々な質問や意見が出されました。さらに、関連したドキュメンタリー映画を鑑賞したり、寺院内の林の木陰で静かに瞑想を行ったりした後、清掃作業をして帰宅しました。

今回、スワンゲーオ寺の皆様には、大変お世話になりました。特に、修行を実践できたことは、スラムの子どもたちにとり貴重な体験になったと感謝しております。



津波孤児センター「バーンターンナムチャイ」 「アース・ホーム」落成式執り行う

パンガー県にある津波孤児センター「バーンターンナムチャイ」で9月11日、「アース・ホーム」落成式が行われました。

文化センターとして利用される「アース・ホーム」は、5年前から津波被災者救済事業を支援されている「Siam Solvay Foundation」の協力により建てられました。

この文化センターは、休日などに地域の子どもの芸術や音楽活動を行えるようにと企画されたもので、100人近く収容できるスペースは映画館としても利用できます。

建物の資材には、粘土、麦わら、もみがらなどを用い、孤児センターの子どもたちが助け合いながら作業を行ってきたため、非常に貴重な作品とも言えます。また、室内の温度を下げる効果があるため、クーラーを設置する

必要もありません。

落成式では、アジア地域 Solvay Group の代表、Roger L. Keams 氏を主賓に、「Siam Solvay Foundation」の Gilks 氏および職員ら26人を迎えました。プラティープ財団からはサン理事長、村長はじめ、近郊の来賓や子どもたち100人近くが出席しました。

「Siam Solvay Foundation」の皆様には、お忙しいところ、式典へのご出席ならびに建設へのご支援をいただき、誠にありがとうございました。

ドゥアン・プラティープ財団
The Duang Prateep Foundation
Lock6, Art-Narong Road, Klong Toey
Bangkok 10110 Thailand
Tel : 001-66-(0)-2249-3553,(0)-2249-4880
Fax : 001-66-(0)-2249-5254
E-mail : dpffound@ksc.th.com
ホームページ: <http://jp.dpf.or.th>
銀行口座 : 三井住友銀行バンコク支店
口座名 : The Duang Prateep Foundation
口座番号 : 2 0 4 1 1 5 9 4 2 1

* 送金の際はご住所、お名前、ご送金の目的等を当財団国際部までご連絡賜りますようお願い申し上げます。

To:

奨学生の紹介 スプラニー・ノイウィライさん



スプラニー・ノイウィライ（ニックネーム＝グラオ）さん（16歳）は、イアマラー職業専門学校の1年生。彼女の家族は祖父母、両親、妹、弟、そして同居している親類を含め計10人で、現在70ライ地区で借家住まいをしています。そのため、家賃が払えなくなったら、引越しをしなければなりません。

父親はタクシー運転手として働き、母親は港の荷役労働で日当200バーツ前後です。両親の収入がまったく安定しないにもかかわらず、3人の子どもが学校に通っています。

収入が支出に追いつかず、彼女は時に学校を休んで母親と一緒に港に働きに行くこともあります。それでも、時間を見つけては、当財団のアートクラブで子どもたちに絵画指導をしています。彼女の夢は厳しい家庭状況を乗り越えて大学を卒業し、美術の教師になることです。

プラティープ財団 幼稚園に教材・備品を寄贈

8月11日、プラティープ財団を代表してミンポン副理事長は、クロントイ地区内にあるフラット11～18地区のルアムナムチャイ幼稚園に教材や備品などを寄贈しました。

この幼稚園は開園から10年が過ぎており、現在、2歳から6歳までの園児約30人が学んでいます。

園児たちの保護者は日雇い労働に従事しており、一日の収入はわずか150バーツ。これでは、授業料や給食代の捻出は厳しいといわざるを得ません。

公的機関からの支援はいっさいなく、このため、当財団が教材などを支給することにしました。教材等を幼稚園に提供していただける方は、是非、当財団へご連絡くださるようお願い申し上げます。



【訂正】前号（84号）P-3の「津波孤児アメリカに1年間留学」の記事中、「--両親や親族を引き取りました。」は「--両親や親族を亡くした子どもたちを引き取りました。」の誤りでした。ここにお詫びして訂正いたします。